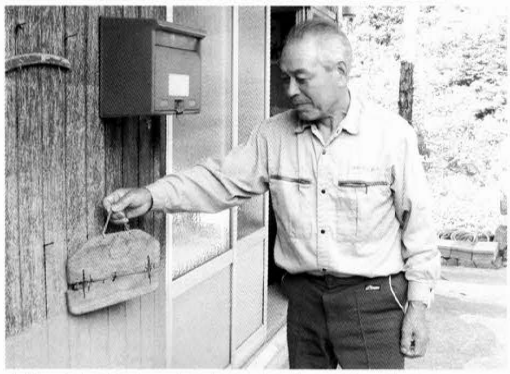
平成11年～16年

1999～2004

平成13年渋草小と面河第一小が統合し、面河小となる

上り坂で狭い道が続く相の木地区。高齢化が進み、空き家も増えているという



木製の「火番帳」は、当日当番となる家の軒先に掛けられている

町並み・村並みシリーズ㊼　相の木地区

「火番」250年絶えず

「火番して(火に気を付けて)な」「はい、分かったよ」――。上浮穴郡面河村相の木地区には、朝と夕方にこんな言葉が交わされる。約二百五十年間、一日も欠かすことなく続いている「火番」のあいさつだ。

火番とは、各戸持ち回りで地区内を回り、火の用心を呼び掛ける習慣。始まりには、こんな理由がある。年代は記録もなく定かではないが、約二百五十年の昔、相の木地区で大火が起こった。急しゅんな山あいを開いて作った地域で、交通の便は良くない。谷まで下り、てんびん棒でくみ上げるほど、水事情も悪い。折からの強風にあおられ、何十世帯もあった家はあっという間に燃え尽くし、たった三軒しか残らなかったという。

火番の習慣ができたのは、それからだ。一日二戸の当番が、朝・昼・夕方と二戸ずつ回り火の用心を呼び掛ける。終わったら、隣の家に木製の「火番帳」を回していく。地区の菅武義さん(七八)も小学生時代から各戸を回っている。「当時は三十世帯くらいあったので、火番が回ってくるのは月に一回。でもそれだけ回るのは大変でした」。回れば、顔も覚えるし話もする。引っ越してきた人も、すぐに打ち解けたという。

火番帳は、始まったころから同じ木製のもの。幅は横約三十センチ、縦約十五センチ。表の部分は擦り切れているが「世帯主の名前を全部書いてあったのだろう」(菅さん)という。割れた部分を針金で何度も何度も補修している。お守り代わりだから、新しく作り替えることもしない。火番のおかげか、相の木地区には大火の後、ただの一度も火事が起こっていない。

今、相の木地区は十世帯。高齢化が進み、独居世帯も空き家も増えた。火番は十日に一度は回ってくる勘定になる。存続は、どんどん厳しくなってくる。しかし菅トシ子さん(七二)は「今は朝夕の二回で一回十五分程度だし、苦にもならない。坂道が多いから健康にもいいよ」と笑う。火番は、地区の住民の生活の一部として、しっかり溶け込んでいるようだ。

(平成14年12月4日)

思い出刻んで最後の夏休み

来春閉校の渋草小

来春閉校になる小学校で「最後の夏休み」の思い出を――。上浮穴郡面河村渋草で「渋草小で思い出を作ろう～サマーフェスティバル・in1999」がこのほど、同小グラウンドで開かれ、PTAらの手作りイベントに地元の児童やOB、家族ら大勢の人が集まった。

過疎・少子化のため、渋草小は平成十二年四月に面河第一小（中組）と統合合併して「面河小学校」になる。施設は面河第一小を使用し、渋草小は閉校になるため、同小PTAが「何か地域ぐるみで思い出になるような行事を」と、今回のイベントを企画主催した。

お宝探しゲームや花火大会、記念撮影など多彩な催しが繰り広げられ、和気あいあいのムードに包まれた。お盆で帰省した卒業生らも集まって同窓会の雰囲気もあり、老若男女が思い出を語り合って夜遅くまでにぎわった。

（平成11年8月20日）

渋草小で行われたじゃんけんゲームで盛り上がる子どもたち

おかえり、古里の運動会へ

閉校跡で30回目

思い出の小学校跡で三十回目の運動会――。体育の日の十月十日、上浮穴郡面河村笠方、旧笠方小学校跡のグラウンドで「第三十回記念笠方秋季大運動会」が開かれ、地元住民や離村者ら約二百人が参加して、互いに親ぼくを深めた。

村誌によると笠方小は明治八年に開校、昭和二十二年には児童数百七十六人を数えたが、同三十四年、面河ダム建設開始に伴って水没地域内の住民が転出、児童数が大幅に減少した。水没対象となったのは八十四世帯三百八十人で、多くは松山市に移った。三十九年には現在の跡地に校舎を新築移転するが、児童数は減少の一途で、四十三年閉校、渋草小に統合された。

閉校の翌年から地区住民が主催し、同窓会と敬老会を兼ねた運動会を実施。中予や東予へ転出した人たちとも連絡を取り合って参加を促し、今では三世代にわたる交流が続いている。

（平成11年10月12日）

旧校舎をバックに競技を楽しむ参加者

さよなら学びや

最後の学芸会　渋草小・幼稚園

過疎化による学校統合のため、平成十二年度末で閉校になる上浮穴郡面河村の渋草小学校・幼稚園（竜田純孝校長）の最後の「渋草ふれあい学芸会」が二月六日、同村渋草の村住民センターで開かれ、児童と教職員、PTAら約百人が交流を深めた。

村誌によると、同小の児童数は一九六〇（昭和三十五）年には百八十一人を数えたが、昭和四十年代後半から年々減少し、現在は二十五人。幼稚園児は七人。本年度いっぱいで中組の面河第一小・同幼稚園と統合し、四月一日からは面河小学校、おもご幼稚園になる。

学芸会は石鎚子供天狗（てんぐ）太鼓の演奏で幕開け。ダンスや演劇、コント、思い出を紹介したスライド、教職員による劇などが次々披露され、児童らが「最後の学芸会の思い出ができました。これから私たちは新しい学校で頑張ります。お父さんお母さん、そして地域の皆さん、ありがとうございました」とお礼を述べた。

同小PTAも「思い出…そして未来に」と題し、母校の生い立ちを影絵、人形劇、劇の三部構成で演じ、重見丈典会長が「この学校は無くなっても、伝統や思い出は心の中で永遠に不滅です。二十一世紀に向けて渋草小の心を引き継いで」と願いを託した。最後に全員で校歌と村民歌を合唱し、別れを惜しんでいた。

（平成12年2月9日）

創作喜劇「渋遊記」を演じる6年生

子供とお年寄り交流

上浮穴郡面河村渋草の面河中学校で五月二十九日、面河幼稚園、面河小学校、面河中学校と地元老人クラブの合同マス釣り・バーベキューが開かれた。

例年は子どもたちだけで行っていた行事を、交流を深めるため今年はお年寄りにも参加を呼び掛けた。児童生徒ら約五十人と教職員、六つの老人クラブのメンバーが参加。中学校のプールに二カ月ほど前から放していたマス約四百匹を、お年寄りと子どもたちが一緒に釣り上げた。

釣った魚は内臓を抜き、くしを刺して校庭でバーベキューに。自分たちで釣ったマスを早速おいしそうにほおばり、交流を深めた。

（平成13年5月30日）

釣り上げたマスを、プール際でさっそくさばく生徒たち

目指せ伊予のファーブル

面河で昆虫調査

昆虫採集から標本づくりまで、子どもたちの手で一貫して行う第二回昆虫調査隊「めざせ！昆虫博士」が五月二十七日、上浮穴郡面河村の面河山岳博物館周辺であった。

採集・標本づくりを通して、より詳しく形など虫の生態を観察し、面河渓の近くにはどんな種類の虫が生息するかを調べてみようと実施した。

松山市から小学校低学年の児童とその親十八人が参加。多様な昆虫が生息する面河川の遊歩道や関門近辺を、博物館学芸研究員の指導を受けながら捕虫網などで採集。自分たちの手で比較的簡単に多くの虫が捕れることもあってか、子どもたちは頭上を飛ぶチョウや植物の葉についた虫を見つけるたびに歓声を上げていた。

（平成13年5月30日）

「どんな虫が捕れたかな？」――網に入った虫を調べる子どもたち

防火も協力を

面河小生など交通茶屋

秋の行楽シーズンを迎え、山火事や交通事故防止を訴えようと十月二十日、上浮穴郡面河村中組、面河小学校の少年消防クラブメンバーらが同村若山の石鎚スカイラインゲート付近で交通茶屋を開いた。

石鎚山の紅葉狩りの行楽客が増えるこの時期に、石鎚スカイラインが無料化された一九九五年から毎年開いている。少年消防クラブの五、六年生と渋草婦人防火クラブ、久万署などから約四十人が参加した。

参加者はそれぞれ手作りの消防クラブのチラシ、防火クラブのマスコットや、携帯用灰皿を配布しながら「シートベルトを締めて、事故に気をつけてください」と行き交うドライバーに大きな声で呼び掛けていた。

（平成13年10月25日）

手作りのチラシなどを渡し、交通安全と防火を訴える少年消防クラブのメンバーら

体験学習って楽しい

面河の小中生ら交流

上浮穴郡面河村渋草の面河中学校（玉井章喜校長）でこのほど、村内のお年寄りを招き、幼稚園・小中学校の子どもたちと交流する体験学習があった。

児童生徒ら約六十人と、地域のお年寄り約三十人が参加。ゲームをした後、中学校のプールで約四カ月にわたって育てたマス約三百匹を、お年寄りの指導を受けながら一緒に釣り上げた。

釣ったマスは二十五センチほどに丸々と太っており、自分たちでさばいて校庭でバーベキュー。慣れない調理に苦しみながらも、みんなで協力しておいしそうにほおばっていた。幼稚園児らはプールでマスのつかみ捕りに挑戦。お年寄りと子どもたちは和やかに交流を楽しんだ。

（平成14年6月7日）

お年寄りと一緒に釣りを楽しむ子どもたち

体験発表に熱い視線

140人参加、研究集会

「上浮穴農業を考える研究集会」が十六日、上浮穴郡面河村渋草の面河住民センターであった。関係者約百四十人が出席、過疎化、高齢化、少子化し担い手不足が深刻化している中山間地の農業の活性化などについて考えた。

上浮穴広域営農団地推進協議会など主催。まず久万農業公園の研修生、藤田国広さんが「久万町への新規就農に当たって」と題して発表。四十歳を間近に控え、前職を辞して農業を志し「やってみて、低収入、重労働、不安定という印象も変わった」と話した。

面河村生活改善グループの松本タツ子さんはグループで面河ならではの名産品を作るまでについて話した。村の観光地で他県の品ばかりが売られている状況に寂しさを感じ、クッキー作りに始まり、カボチャのまんじゅう「石鎚の夕日」完成までの苦労を紹介。「今年は大豆の加工物に取り組みたい。地元に目を向け、美しい、おいしい面河を作っていきたい」とした。

（平成14年1月18日）

農業の活性化について考えた研究集会

1年間無事故を競う

みんなで一緒に交通安全に取り組む「無事故・無違反コンテスト」の開始式・出発式が七月十七日、上浮穴郡久万町の久万署であった。

コンテストは運転者に交通社会の一員として自覚を高めてもらい、自主的に交通ルール、マナーを守ることで交通事故を減らそうと実施。今回で八回目。郡内の自治体や事業所などの単位で、五人一組のチームをつくり、一年間無事故・無違反を競う。

前年度は八十三チームが参加し、五十チーム（達成率六〇％）が無事故・無違反を達成した。本年度は八十二チームが参加する。

開始式では、上浮穴交通安全協会、上岡義幸会長のあいさつの後、交通安全を祈願して、面河小の児童が石鎚天狗（てんぐ）太鼓を披露。（平成15年7月18日）

コンテスト参加者の無事故・無違反を祈り、石鎚天狗太鼓を披露する面河小児童

母子家庭の福祉向上を

面河で上浮穴の会員交流

第四十五回上浮穴郡母子寡婦福祉大会が一日、同郡面河村渋草の住民センターであった。郡内の会員約九十人が参加、講演やアトラクション、表彰式などを通し、交流を深めた。

母子寡婦の福祉向上を目的に、毎年開かれている。高門頼子会長が「われわれは自立が大切。一人の人間として自立した集まりでありたい」とあいさつした。

（平成14年9月4日）

高門会長（右）から賞状を受け取る表彰者

石鎚天狗太鼓ハワイで演奏へ

日系人国際交流「まつり」参加

上浮穴郡面河村の和太鼓グループ「石鎚天狗太鼓保存会」は、六月十日から米国ハワイ州ホノルルで開かれる日系人の国際交流イベント「まつりIN HAWAII」（同実行委主催）に初めて参加する。

同まつりはハワイ州政府公認行事で、今年で二十回目。昨年は日本から六千人が参加、観客総動員数は二十六万人に上った。

石鎚天狗太鼓保存会は平成元年、村おこしの一環で地元の若者が中心となって結成した。現在、女性五人を含む農林業、役場職員、会社員、自営業など二十代から四十代のメンバー二十人が、毎年お山開きでの奉納演奏や、県内の和太鼓グループとの技術交流会を開催するなど積極的な活動を続けている。

今回のまつりは、村からも一部補助を受け、メンバーのうち十四人が参加。十日に出発し、十一日のワイキキカーニバルと、十二日の太鼓フェスティバルで演奏する。

曲目は、石鎚山をテーマにした「登山」「御神体」「筏（いかだ）流し」「嵐」などで、天狗にふんした打ち手が激しく舞うさまが見所。今回は特別に「ハワイバージョン」をアレンジしたというほどの熱の入れようだ。

（平成11年6月9日）

勇壮な演奏を披露する、天狗にふんした打ち手

大草履で悪霊退散

4地区で「鬼の金剛」

悪霊退散、無病息災を願う小正月の伝統行事「鬼の金剛」が一月十六日、上浮穴郡面河村渋草などで行われ、住民らが地区境の川に大草履をつるして一年の安寧を願った。

「地獄のカマのふたが開く」と言われる一月十六日に行われ、約二百年前から続いている。かつては郡内各地区で見られたが、後継者不足などで同村でも現在では渋草地区の里成、中里成、土泥と若山地区の中ケ市の四カ所のみで続けられている。

大草履と、十六善神にちなんだ十六組の箸、角石とご飯を詰めたわらすぼ弁当、魔よけのダイダイなどを地区の入り口の川につるす。

（平成11年1月17日）

割石川に、草履やわらすぼ弁当をつるした縄を掛け渡す里成地区の人たち

石鎚山に天狗舞う

勇壮に奉納太鼓

上浮穴郡面河村土小屋の石鎚神社遙拝殿でこのほど、同村の青年太鼓グループ「石鎚天狗太鼓保存会」の奉納演奏があった。

奉納太鼓は、京都市の東宗範さんが石鎚山天狗伝説に合わせ創作。一九八九年に発足した保存会が、村の若者を中心に毎週二回練習を重ねて継承している。昨年はハワイでの国際交流イベントにも参加するなど活発に活動している。今年は同村相の木の面河特産品開発センター前で舞ったあと、土小屋で奉納演奏を披露した。

太鼓はお山開きの様子を表現した「登山」、仁・智・勇の御神体を模した「御神体」、木を切り出す情景の「筏流し」、夏前に石鎚山に降ってすべてを洗い流す大雨を表した「嵐」の四部で構成。約二十分間、大中小三種類の太鼓の響きとそれに合わせて舞い踊る天狗の動きに、参拝客らは熱心に見入っていた。

（平成12年7月14日）

勇壮な舞を披露した石鎚天狗太鼓の奉納演奏

負傷者救え

山岳道路で救急訓練

「救急の日」の九月九日、上浮穴郡面河村若山の石鎚スカイラインで集団救急救助訓練が開かれ、上浮穴消防本部や地元消防団、久万署、婦人防火クラブ員、地元中学生ら関係各機関約百八十人が参加した。

同消防本部が主催、今年で十五回目。二年に一度は、高知県境の高吾北消防本部との合同訓練も実施している。今年はより実質的な訓練を目指そうと、山岳道路でカーブの多い石鎚スカイライン周辺を訓練場所に初めて選んだ。

訓練は、同スカイラインの金山橋付近で乗客二十人を乗せた下りの観光バスが横転、一部乗客が金山谷川の川底に投げ出され、死傷者が多数出たと想定。一一九番通報を受けた上浮穴消防本部が出動、地元消防団や警防隊、県消防防災航空隊に応援を要請した。

（平成11年9月14日）

石鎚スカイラインで救急訓練、「負傷者」の手当てに当たる救急隊員ら

伝統脈々と

菅さん95歳で現役

面河万歳は、明治の初めに上浮穴郡に伝わったといわれる、面河村若山に残る郷土芸能。この万歳のレパートリーとして、新たに二十種類にも及ぶ演舞を作ったのが、菅作見さん(九五)。

面河万歳の形成に、菅さんは大きな役目を担った。就職のため、十八歳で松山に出た菅さんは、下宿のおばさんに誘われ、伊予万歳のルーツといわれる「溝辺万歳」を見に出かけ、その踊りに魅せられた。家業を継ぐため面河村へ戻ってきた菅さんは、若者を集め、自分なりの振り付けを考え、歴史を調べて演舞を作り上げた。

「面河で育った伝統文化が、このままでは廃れてしまう」と、若山地区の人たちが平成十年、保存会を設立した。菅さんを中心に現在は八人が参加。村の祭りや文化祭で万歳を披露し、伝統の継承に熱意を燃やしている。「できれば若い人がほしい。ぜひ継承してもらいたい」。それが菅さんの願いだ。

(平成13年1月3日)

扇子の回し方を指導する菅さん(左)

自然と共存共栄を

21世紀祝い記念碑

上浮穴郡面河村笠方の面河ダム公園多目的広場で五月十三日、二十一世紀記念行事があり、村内外から約二百六十人が参加して新世紀のスタートを祝った。

式典は、二十世紀を生き抜く中で急激な過疎・高齢化という厳しい現実を迎えた面河村で、新世紀元年を機に、恵まれた自然とともに手を携えて生きていこう、と同村が計画した。

記念碑を除幕した後、梅木正一村長が「自然とともに生き、栄えることは村民の願い。今日を新生面河村のスタートにしたい」とあいさつ。二十五年後に開封する予定のタイムカプセルに村内の幼稚園児、小中学生が作文や絵画などを入れた。

石川和男松山東雲女子大学教授の記念講演の後、参加者が桜やイチョウの木四百本をダム周辺や歩道沿いに記念植樹した。

(平成13年5月16日)

21世紀記念の碑を除幕する関係者

すくすく育って30年

面河少年自然の家で記念行事

開設してから三十年目を迎えた面河少年自然の家でこのほど、記念行事が行われた。歴代の所長や指導員、調理員ら約五十人が出席し、旧交を温め合った。

少年自然の家は、閉校となった若山小学校跡を利用して一九七一年に開設。青少年健全育成などを目的にした体験施設として、これまでに児童生徒を中心に約十六万二千八百人が利用してきた。

梅木正一村長が「多くの子どもたちがルールを学び友情を育て、自主性や協調性を自然の家で学んだ。経営は苦しいが、今日をこれまでの反省と再検討のいい機会としたい」とあいさつ。一人ひとりが自己紹介した後、運営状況やスライドを使った活動紹介で三十年の歩みを報告した。

（平成12年11月22日）

過去の活動や運営状況の報告もあった
面河少年自然の家30周年記念行事

独居老人らに宅配

面河郵便局と村、サービス開始

上浮穴郡面河村の面河郵便局（中川良夫局長）と同村は、村内の七十歳以上の独居のお年寄りと高齢者夫婦四十三世帯を対象に、生活用品の注文受け付けや配達などを行う「ひまわりサービス」を三月一日から開始した。

同村、村社協、同郵便局で「生活サポート協議会」（会長・脇本武雄村長）を結成。対象者が、希望する生活用品などを電話または注文用はがきで同協議会に連絡すると、村内の農協や個人商店など三カ所の協力店に通知され、直接または郵便局を通じて品物が配達される仕組み。

同サービスは過疎地域の高齢者在宅支援サービスの一環として、平成九年九月から始まった郵政省事業。十年十二月末現在で全国では百二十四市町村で実施している。県内では南宇和郡内海村に続いて二例目。

（平成11年3月4日）

テープカットでサービス開始を祝う
中川郵便局長（左）ら

トイレと休憩所が完成

石鎚山・土小屋に県が整備

県が整備を進めていた石鎚山の土小屋ロータリー園地の公衆トイレと休憩所が、このほど完成した。

周囲の景観に配慮して、木材を多用。トイレは合併処理浄化槽を完備し、汚水を浄化、洗浄水として再利用するなど環境に配慮した。

トイレ、休憩所はともに木造平屋建て約三十平方メートル。トイレは、男性用（大二、小二）、女性用（四）、多目的（一）のほか、ベビーベッドや手すりが設置されている。

（平成13年7月31日）

石鎚山の土小屋ロータリー園地の公衆トイレと休憩所

全国ないないサミット

国道も鉄道もない自治体の代表者が集う「第十二回全国ないないサミット・inおもご」（国道も鉄道もない市町村全国連絡会議主催）が十月六日、上浮穴郡面河村の村民体育館で開かれ、二十七町村約八十人が参加して介護保険制度などについて考えた。

同会議は昭和六十三年に発足し、現在、北海道から沖縄まで八十町村が加盟。県内では同村のほか宇摩郡別子山村、温泉郡中島町、喜多郡河辺村が加わっている。

サミットでは、会長の関口茂樹・群馬県鬼石町長が「地方の果たす役割を認識し合い、均衡ある社会経済の発展に向けて実践を」とあいさつ。総会に続き介護保険の現状と問題点を共通テーマに話し合った。

（平成11年10月7日）

全国27町村が集まり、介護保険制度の課題などを話し合った「ないないサミットinおもご」

レトロに変身

面河郵便局

上浮穴郡面河村、面河郵便局（中川良夫局長）の局舎が移転新築され、十一月二十八日、同村渋草の現地で落成式があった。六日から新局舎で業務を開始する。

現在の局舎は築後四十四年を経過し老朽化。新局舎は現局舎から二百メートルほど離れた、建設中の国道494号バイパス沿線に位置する。周囲に面河中学校や村営団地などがある村の中心部。

建物は木造二階建て約二百六十六平方メートル、久万産のヒノキをふんだんに使った。石鎚の連山をイメージしたという外観は、ステンドグラスを施したレトロなムード。高齢者、障害者に対応したトイレや点字板などを設けた。

（平成11年12月1日）

渋草に完成した新局舎

超えて新世紀へ

面河村制施行110年記念式典

上浮穴郡面河村の村制百十周年記念式典が十一月二十一日、同村渋草の村住民センターであり、関係者ら約五十人が出席して祝った。

同村は明治二十二年の町村制実施で柚野村と大味川村になり、同二十三年に両村が合併して「柚川村」となったが、昭和九年、村内の名勝・面河渓の名前にちなんで「面河村」と改称し、現在に至っている。

式では脇本武雄村長が「この百十年間は村にとって有史以来の波乱に満ちた時期でもあったが、二十一世紀を目前に控えた今、より一層村民の幸せを願い、さらなる努力をしていきたい」とあいさつ、各分野で功労のあった村民を表彰した。

（平成11年11月23日）

功労者表彰などがあった村制110周年記念式典

県内で9番目

戸籍総合システム運用

上浮穴郡面河村は三月三十一日、行政サービスの向上と事務処理の迅速化を目指した戸籍総合システムの運用を始めた。戸籍の電算化は県内自治体で九番目。

これまで戸籍証明書の発行は原本を複写するなど、手作業処理のために時間がかかっていた。新システムではコンピューター端末で検索し、証明書を自動的に発行。三分程度で交付でき、処理時間が大幅に短縮される。本籍地が同村内にある千三百七十八戸籍・三千三百四十三人が対象。総事業費は約千二百万円。

同日、同村役場で開始式があり、梅木正一村長が「町村合併を前に電算化を進めることで、安心感、期待感が持てる」とあいさつ。同村商工会の西岡和夫会長に戸籍証明書が初交付された。

（平成15年4月2日）

戸籍総合システムの開始式で証明書を初交付する梅木村長（左）

わが村の福祉拠点完成

介護支援施設来月オープン

上浮穴郡面河村渋草の在宅介護支援施設「おもご高齢者生活支援ハウス」の落成式が三月十八日、同施設であり、関係者約五十人が完成を祝った。

施設は、高齢者が安心して暮らせる生活の支援と、福祉増進を目的に建設。鉄筋二階建て、延べ床面積千四百二十七平方メートル。総事業費四億三千二百万円。四月一日オープン予定。

老人デイサービスセンターや在宅介護支援センター、生活に不安がある六十歳以上の人を対象にした居室（十一部屋、定員十二人）を備える。床や壁、天井にはスギやヒノキなど久万材を中心とした県産材を使い、木のぬくもりを感じられる建物になっている。

式では、梅木正一村長が「支援ハウスが面河の福祉の拠点となり、合併後の新町でも重要な福祉施設となることを期待している」とあいさつした。

（平成16年3月19日）

完成した「おもご高齢者生活支援ハウス」

《合併関連》

合併推進協設立へ

上浮穴郡議員研修

上浮穴郡町村議会議員研修大会が八月二十一日、同郡面河村渋草の住民センターであり、「市町村合併の取り組みについて」をテーマに討議。議員が合併について研究を進める推進協議会を設立することを決めた。

討議では、各町村の代表一人ずつが現状やそれぞれの考え方を発表。「ごみ処理や消防など広域行政の実績もあり、まず五町村で話し合いを」「人口が少なく、郡の枠を超えた合併も視野に入れるべき」「高い高齢化率を考え、お年寄りをどうするかを中心に据えて考える必要がある」といった意見が出た。

推進協議会について詳細は郡町村議会議長会に一任。今後一～二カ月以内に会を設立し、各町村三～五人の議員を出し合って話し合いを進める予定。

（平成13年8月23日）

市町村合併について話し合った上浮穴郡町村議会議員研修大会

新町構想住民説明会始まる

上浮穴郡四町村（久万町、面河村、美川村、柳谷村）合併時の新町将来構想の住民説明会が一月二十八日夜、面河村でスタートした。

将来構想を住民に周知して合併の方向性を明らかにするとともに、新町建設計画に住民意見を反映させようと、「かみうけな合併協議会」が主催、実施した。住民約三十人が参加。合併協議会の取り組み状況報告、将来構想の説明の後、意見交換が行われた。

住民からは「村で取り組む事業や施設はどうなるのか」と不安の声が上がった。主催者側は「各町村の共通事業は調整統合を図るが、特色ある取り組みは新町へそのまま持ち込み、その後調整する」と答えた。ほかに「面河は新町になればますます不便になる。久万へトンネルを抜き便利にしてほしい」「県内に先んじた林業経営に取り組んでほしい」といった意見が出た。

説明会は二月末まで四町村で計十回開かれる。

（平成15年1月31日）

村や新町の将来についてさまざまな意見が出た住民説明会

新町名は「高原町」

上浮穴4町村合併に向け決定

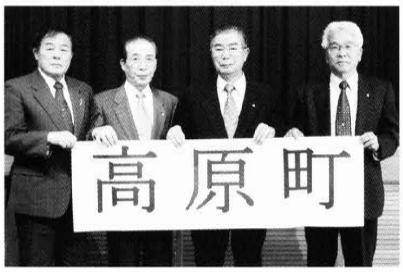
上浮穴郡四町村（久万町、面河村、美川村、柳谷村）で構成する法定合併協議会「かみうけな合併協議会」の第十一回会合が十六日、面河村であり、新町の名称を「高原町（こうげんちょう）」と決めた。

新町名は四町村の住民などを対象に公募。四千六十二件、九百三十二種類の応募があり、小委員会が「久万」「美川」「くま」「石鎚」「高原」の五つに絞っていた。

委員二十四人が投票し、「高原」と「久万」が同数の十二票を獲得。決選投票した結果、十三対十一で「高原」を選出した。選定理由は「県内でも標高が高く、自然の豊かさと四町村をさわやかに、新しく表現している」など。

同協議会長の木下久敬・美川村長は「高原の良さを生かし、自然を大切にしたまちづくりに向け、四町村が協力したい」と話した。次回は五月十四日、美川村で開かれる。

（平成15年4月7日）



新町名「高原町」の幕を持つ上浮穴郡の4町村長

「久万高原町」に決定

新町名全会一致で

上浮穴郡四町村（久万町、面河村、美川村、柳谷村）で構成する法定合併協議会「かみうけな合併協議会」（会長・木下久敬美川村長）の第十七回会合が八月十三日、面河村であり、新町名「高原町（こうげんちょう）」を見直し、「久万高原町（くまこうげんちょう）」に変更することを決めた。

新町名をめぐっては、四月の合併協議会で「高原」を選定。これに対し、一部の久万町民が新町名撤回を求める「久万の地名を愛する会」（平岡新太郎会長）を結成し、約六千八百人の署名を集めた。

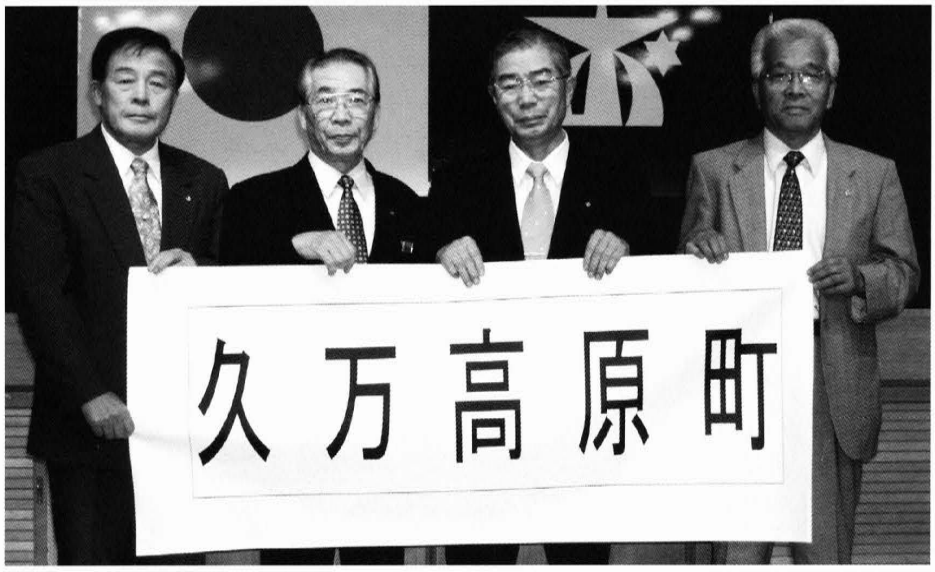
合併協議会は五月、町名見直しに向けた検討を開始。八月七日、「久万高原」への変更を基本合意した。

会合では、各町村が新町名を持ち帰り調整した結果を報告。「久万高原」に対する異論はなく、全会一致で決定した。

木下会長は「みんなの気持ちがそろえば、町名の変更はやむを得ない。久万郷と呼ばれた土地であり、適切な名前だ」と述べた。

また、平岡会長（七〇）は「住民運動の成果があった。『高原』は付いたが、受け入れざるを得ない。住民運動のパワーを、今後の町づくりに生かしたい」と話した。

（平成15年8月14日）



見直し後の新町名「久万高原町」の幕を持つ上浮穴郡の4町村長

上浮穴4町村合併調印

平成16年8月に「久万高原町」

上浮穴郡の久万町、面河村、美川村、柳谷村の合併協定調印式が十二月十四日、美川村であり、四町村長が二〇〇四（平成十六）年八月一日の対等合併、新町名「久万高原町」などを定めた合併協定書に署名した。新設（対等）合併では県内四番目。

法定協議会「かみうけな合併協議会」の委員二十四人と加戸守行県知事らが出席。協議経過説明後、久万町に本庁を置き、新町議員定数を十八とするなど二十三項目の協定書に調印した。

協議会長の木下久敬美川村長は「山あり、谷ありの厳しい協議だった。人、里、森が輝く元気な町を目指したい」とあいさつ。加戸知事は「住民が連帯感を持ち、未来に向けて大きく羽ばたいてほしい」と祝辞を述べた。

各町村議会は十二月定例議会で現在の四町村を廃止して新しい町を設置する廃置分合を議決。〇四年二月県議会での議決、総務大臣の告示を経て、合併が正式決定される。

同協議会は新町名をいったん「高原町」に決めたが、住民の反対運動もあって「久万高原町」に変更した。

（平成15年12月16日）

面河の魅力、外から再発見

水源地域対策アドバイザー視察報告

ダム所在地域の活性化を図るため国が設けた「水源地域対策アドバイザー」の指導団が六月二十二日、上浮穴郡面河村を訪問。二日間の現地視察のあと、同村渋草の住民センター大ホールで報告会があり、村の活性化対策などを話し合った。

現地報告会には村関係者や村民約六十人が出席。各部門のアドバイザーからは「面河は第一級の観光地。景色のみに固執するのでなく国道494号、197号を結び松山を中心とした周遊ルートを考えてみては」「スカイライン沿いの樹木の垂直分布は国際的価値もある。自然探勝ルートをつくってもいい」「地域資源を掘り起こし、発信すべきだ。歴史や伝統、民話を使って住民が主役になりイベントを盛り上げてほしい」などの意見が出され、参加者は真剣な表情で聞き入っていた。

（平成12年6月25日）

アドバイザーの指摘に熱心に耳を傾ける参加者

「森の回廊」構想普及を

面河でフォーラム

減少する自然林で生きる生物のために生態系としての森林を維持しようと、四国の樹林帯をつないで回廊を張り巡らせる「森の回廊」構想を実現するために発足した「森の回廊・四国をつくる会」のミニフォーラムが九月十日、上浮穴郡面河村若山の面河山岳博物館で約三十人が参加して開かれた。

午前中は回廊の主要なコア（核）ともなる石鎚山の土小屋付近で、生態系保護地域の現状を視察。午後からは県内の研究者が自然や問題点などについて発表を行った。

岡山健仁面河山岳博物館副館長が石鎚山の自然について紹介した後、山崎三郎同会会長が森の回廊の構想と取り組みについて説明。「大切なのは生物の生息地をどう保存保護していくか。自然樹林帯だけで回廊を作るのは難しく、人工林利用も不可欠。民有林所有者にも働き掛け、理解を求める必要がある」と話した。

（平成12年9月13日）

森の回廊の構想について説明する山崎会長

自然の輪、未来につなぎたい

水源かん養へ植林

保水力のある木を野山に植えて、水源かん養に役立つ土地を広げようと、松山市上野町の栗原富栄さん（五九）＝日浦中校長＝が上浮穴郡面河村笠方の土地約八ヘクタールを購入し、ケヤキの雑木林造りに取り組んでいる。

植林を始めたのは昨春。以前から将来の水資源保持に不安を抱いていた栗原さんは、三年間同村を駆け回り、取り組んで効果の出る広さの土地を手に入れた。

地元の森林組合に依頼し、スギなど水源かん養に不向きな木々を伐採。八千本のケヤキの苗を植林。ヒノキの苗二万四千本も植えて成長を競わせ、枝下の長い良いケヤキを目指している。ヒノキは様子を見て伐採し、いずれはケヤキだけの森林にする。土地代や苗代なども含め、かかった費用はすでに二千万円を超える。「管理は大変だが、ほっておけば将来大変なことになる。子孫のためにも、水源を守ろうという輪が少しでも広がってほしい」と願っている。

（平成13年6月7日）

「大きく育てよ」。広大な土地の中で願いをこめて苗木を補強する栗原さん

負の遺産・愛媛の川が危ない・第3部・河川荒廃（5）山林荒廃の影響

水量が激変、生態系に異変

石鎚山系から流れ出す水は川底まで透き通る。典型的な山地渓流の景観を保っている面河川。しかし、この清流に異変が起きている。川底の石をはぐれば、多種多数の水生昆虫が見つかるはずなのだが、種類、個体数とも極端に少ない。石にコケもついていない。

昨夏、面河川の上浮穴郡美川村御三戸と面河村面河渓で、水生昆虫を調べていた松山淡水ベントス研究所の桑田一男所長（六八）＝松山市東石井町＝は目を疑った。「水質は良好なのに。こんなはずはない」。大きなザルを手に約一時間ずつ、虫を探し続けた。

結局、御三戸で八種類十二個体、面河渓で六種類七個体しか見つからない。自然が残る山地渓流なら、一すくいで採取できる個体数より少ない。この調査結果は、水中の生態系ピラミッドが、底辺から崩壊しつつあることを物語っている。

アメノウオやアユの稚魚を毎年、各四十万～五十万匹放流している面河川漁協（組合員千三百人）。森岡惇一組合長（七四）は「放流しても歩留まりが悪い」と苦々しく語る。アメノウオは水生昆虫、アユはコケを食べる。餌がなければ魚も生きられない。

面河川の何が変わったのか。森岡組合長は、子どものころの記憶をたどりながら続けた。「大きく変化したのは水量。面河川は、山が深く、雨が降らなくても豊富な水が流れていた。今は、雨が降れば一気に流れ、渇水期は極端に減る」。

渇水期の水量低下は水温上昇を招く。桑田所長は調査過程で、川底にいるはずのカワゲラが犬かき泳ぎをして、もがいている姿を見た。「水温が上がり、酸欠状態になっている証拠。山地渓流は通常二〇度まで。それが、二八度まで上がっていた。これでは水生昆虫は生息できない。さらに、夏季の異常増水で水生昆虫が洗い流されてしまう」。

二人が原因をたどり、行き着いたのは、山の植生変化と荒廃だった。「かつて面河川の背後は、天然の木が茂る豊かな山だった。戦後、スギやヒノキが植林され、様相は一変した。さらに、木材価格の低迷で手入れもままならない状態」（森岡組合長）。

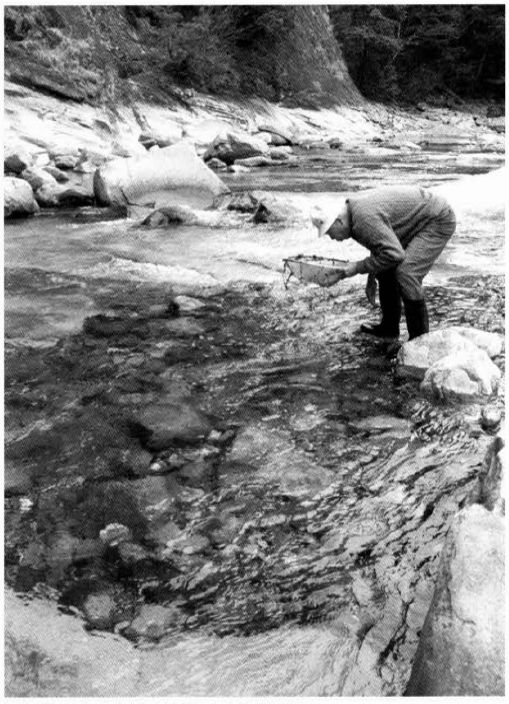
山が荒廃し、保水力を失えば、川は荒れる。「肥よくな表土を持つブナなどの落葉広葉樹林は、降雨を表土に吸収し、ピーク流量を減少させる。渇水期の冬季は、葉を落とし、樹木の蒸発散が抑制されるため、針葉樹より保水機能は高いと考えられる」。水源地域の水循環と農林地の機能について研究している愛媛大農学部の高瀬恵次教授はこう理論づける。

ただし、人工林をすべて否定するものではなく、「間伐などの適正管理により、表土を肥よくにし、蒸発散を抑制することで、ある程度、水源機能を高めることができる」とも指摘している。

豊かな山によって豊かな川が生み出される。「このままでは面河川は駄目になる。漁協が上流域の山を借り、自然林に戻すことも真剣に考えないといけない。山を守る運動をわれわれが声高に叫ばなければ、取り返しがつかなくなる」。森岡組合長の言葉には危機感がにじんでいる。

〈カワゲラ〉清流の指標生物。幼虫は水生。通常は、清流の瀬にある石の裏にへばりついて生息している。カワゲラ類の幼虫の多くは、足の付け根にえらがついている。水温が高くなり、水中の酸素が欠乏すると、えらに酸素を送り込むために、腕立て伏せや、水面に浮いて犬かき泳ぎのような動きを見せる。

（平成13年2月8日）



面河渓で水生昆虫を調査する桑田所長。
清流だが、昆虫が極端に少ない

負の遺産・愛媛の川が危ない・第4部・ダム(10)新たな一歩へ

自然破壊、コストと認識を

無駄な公共事業の中止を訴え、全国各地で反対の声を上げている住民たちが昨年暮れ、東京の九段会館に集まった。公共事業のあり方を論議する国際シンポジウム。「美しい自然を後世に残したい」という共通の思い。止めたい公共事業のシンボルが「ダム」だった。

「ダムの時代は終えんを迎えている」――世界的な環境保全団体・国際河川ネットワーク(本部・米国)のオーエン・ラマーズ副代表は断言した。各国からの大学、政府、自然保護団体関係者が、ダムなど人工構造物を撤去し、自然の川に戻す取り組みを次々に紹介した。欧米の流れは、既に日本を大きく引き離している。

ラマーズ副代表は続ける。「ダムは寿命を迎えたとき、極めて危険な存在だ。修理コスト、生態系を破壊し続ける環境コスト、自然の流れを取り戻したい住民の要望。それらがダム撤去の機運を生みだした」。昨年五月までに約四百七十のダムや堰(せき)が撤去されたという米国の状況が、あらためて参加者の目を国内に向けさせた。

日本のダムの実態はどうか。国土交通省河川局治水課は、欧米と日本の自然的、地理的、社会的条件の違いを基に「ダムは、日本の国土条件下では有効な河川整備手法の一つ。ダムほど効果が費用を大きく上回る公共工事はない」と説明、推進の立場を崩さない。

同省が展開するこの「費用対効果」論も、シンポで議題となった。建設事業費しか費用に計上しない考え方を、オランダ・エラスムス大学の経済学者カーステン・シュイット氏は環境コストの面から断じた。

「建設で破壊される環境や生態系は、社会全体が背負うコストだ。これを、ダムを造る側に認識させる必要がある。自然の浄化機能、魚などの生産能力、保水能力などの価値を過小評価することなく、費用に含めて計算する必要がある」

「環境の世紀に、こうした声を子孫に引き継ぐことは、現代人の義務」との認識は普遍化しつつある。多様な反対運動を実質化するため、全国のダム反対運動家や法律家らが平成五年、「水源開発問題全国連絡会」を組織した。

「土地収用法改悪や公共工事抜本見直し検討への対応」に始まり、ダム建設中止後の地域振興まで包含した運動を展開。各地での粘り強い運動や訴訟は、日本から不要なダムを追放する大きな力となりつつある。

さて、愛媛のダム。住民から事業の必要性に疑問の声が上がっている浦山ダム(土居町)、中山川ダム(丹原町)、山鳥坂ダム(肱川町)。無駄な公共事業で借金を子孫に残すことへの憂いもまた、日本、欧米で共通している。

〈国際シンポジウム〉 全国の市民団体で構成する公共事業チェックを求めるNGOの会が「21世紀の公共事業のあり方を求めて」をテーマに開催。環境問題専門家らの講演や全国で実施されているダム、河口堰、埋め立てなどに「無駄な公共事業」と反対運動を展開している市民団体関係者らの報告が行われた。

(平成13年6月17日)

道前道後平野の農業用水、松山の工業用水を蓄える面河ダム。利水に役立つ一方で、下流の水が極端に少ないなど環境に悪影響を与え続けている

新水源の「壁」　松山の水問題(3)面河の水

受益農家の「保険」　上水転用の議論に困惑

「虹の用水」と言われ、道前道後平野の農地を潤してきた面河ダム(上浮穴郡面河村)の農業用水は、松山市の上水道転用の「標的」にされ続けてきた。農地の宅地化などで耕作面積が減少しているのに、いつまでも同じ水量を使うのはおかしいという理由からだ。

県農地整備課によると、面河ダムの受益地内の農地は確かに減っている。道前道後平野水利事業が始まった平成五年当時の一万三千百九十九ヘクタールに比べ、十一年は一万四百五十ヘクタールで約二割減。しかし、農地の消費水量増加や、同ダム以外の既存水源の実情などから、農水の受益者側は「ダムの水は余っていない」と一貫して主張してきた。

同課によると、道前道後平野で一年間に必要とされる水量は、自然に降る雨を除き、約二億六十八万トンで、昭和三十八年当時の約一億九千四百六十万トンに比べ微増している。理由に、「水田の転作奨励もあり、畑作可能な輪換田の割合が増えた」ことを挙げる。

水田で畑作を可能にする輪換田は、水はけをよくしなければならない。その分、稲作に使う水も増える。水田の減水深(一日に水が減る量)は、昭和二十七、二十八年ごろの調査では、道後平野全体で平均二十二ミリだったのが、昭和五十八、五十九年の調査時には同二十八ミリと増加。耕作地の土壌構造の変化で水の使用量が増えたことを裏付けている。

そもそも面河ダムの農水は受益地内の既存水源の不足分を補給するとの位置付けだ。同ダムの水利権量は約三千二百十四万トンあるが、必要量全体の約二六%にすぎず、農家にとってダムの水は渇水時のいわば保険だ。

面河ダム以外の水源は▽農地に直接雨水が流れこむ直接流域▽自然湧水▽取水堰を通す河川取水▽ため池▽地下水取水(ポンプアップ)――など。このうち、最も多いのは河川取水の約五千六百十三万トン。次いで、地下水の約四千二百九十万トン。

その地下水も三十八年の計画当初は、「ポンプアップによる電気代の負担などを軽くする」ため全廃する計画だった。しかし、都市化の進展などで自然湧水量が三十八年の約五千七百七十二万トンから平成十一年には千四百八十四万トンと激減。「地下水に頼らなければ量は賄えない状況」にある。

面河ダム以外の既存水源は当然、降雨量の影響を受ける。雨が多ければダム水の使用量は減り、逆に雨が少なければダム水の使用量は増える。同ダムの農業用水の水利権量に対する実際の取水率が平成四年以降十年間、約二〇～一〇〇%と年によってばらつくのは雨の量による。今年の取水率は約八八%で、一〇〇%使った平成六年の異常渇水時に次ぐ高水準。「十年に一度の渇水に備える」という面河ダム本来の役割を果たした年だったといえる。

雨が降らなければ困るのは農業用水も上水道も同じ。道前道後土地改良区連合の黒田一郎専務理事は「農家はいつ干ばつが来るか分からないと心配し、倹約して水を使っているのだが」と、再び浮上してきた転用議論に浮かない表情だ。

(平成14年11月12日)

平成6年の異常渇水のときは、松山市の上水に転用された面河ダムの水

えひめ偉人伝(69)石丸富太郎

面河渓を世に紹介

色とりどりの花、新緑、紅葉、雪模様……。春夏秋冬、それぞれの趣を見せ、四季を通じ観光客の絶えない上浮穴郡面河村の面河渓。今では年間約四十万人が訪れる県内屈指の名勝地だが、明治末ごろまではほとんど人に知られていなかった。その紹介に力を尽くしたのが石丸富太郎だった。

面河村誌などによると、富太郎は温泉郡重信町生まれ。十四歳の若さで面河村大成の小学校教師として勤め始めた。その後愛媛師範学校に入学、卒業後に柚川村(現面河村)渋草尋常小学校の訓導兼校長となった。その一方で、面河の景色を広く世間に知ってもらおうと考えた。

文章が巧みだった富太郎は、ペンネームを小波(さざなみ)とし、当時の海南新聞にその紹介を試みた。さらにその素晴らしさを同紙編集長だった田中蛙堂(あどう)に説明、熱心に調査を勧めたという。

蛙堂は熱心さに動かされ、明治四十二年に詩人や画家、登山家など九人で面河を訪れた。面河始まって以来の観光団ということもあり、村が総出で歓迎したという逸話も残っている。

訪れたのは十月の終わりで紅葉も既に終わっていたが、その鮮やかな眺望に一行は大いに驚いた。崖(がけ)を登り、岩を伝っての大変な観光になったが、新しい景色を目の当たりにして空船橋、蓬莱渓など今も残る景色の名付け親にもなった。その様子は紀行文として新聞紙上をにぎわせ、面河渓を訪れる観光客が増えるきっかけとなった。

富太郎は後に海南新聞の記者に転じたが、面河の宣伝に終生努力を惜しまなかった。面河渓は昭和三十年に国定公園の指定を受け、観光地としてその名声が上がっていくが、富太郎は二十四年、六十四歳で亡くなった。

現在は道路網の整備が進み、松山方面からも気軽な日帰り旅行のコースとしても考えられている面河渓。その発展の裏には、富太郎らの献身的な努力があった。

(平成13年6月20日)

面河渓の紹介に尽力した石丸富太郎

四季折々の姿を見せ、年間約40万人が訪れる面河渓

10万人目

面河山岳博物館入館者数

上浮穴郡面河村若山の面河山岳博物館（館長・梅木正一村長）の入館者が七月二十八日、開館以来十万人に達し、記念の入館者となった同郡美川村日野浦、阪本大志君（八つ）＝美川南小二年＝に入館証、記念品が贈られた。

山岳博物館は平成三年四月に開館。約七万点の資料があり、石鎚山系の化石や鉱物、動物の剝製（はくせい）や標本を展示。石鎚山系、面河渓の地質的な成り立ちの解説のほか、お山開きの様子をパノラマ化したものや、山岳信仰や登山史の資料なども集められている。年に数回、企画展も開かれている。

（平成12年7月29日）

10万人目の記念入館証を受け取る阪本大志君

モモンガ、絵はがきに

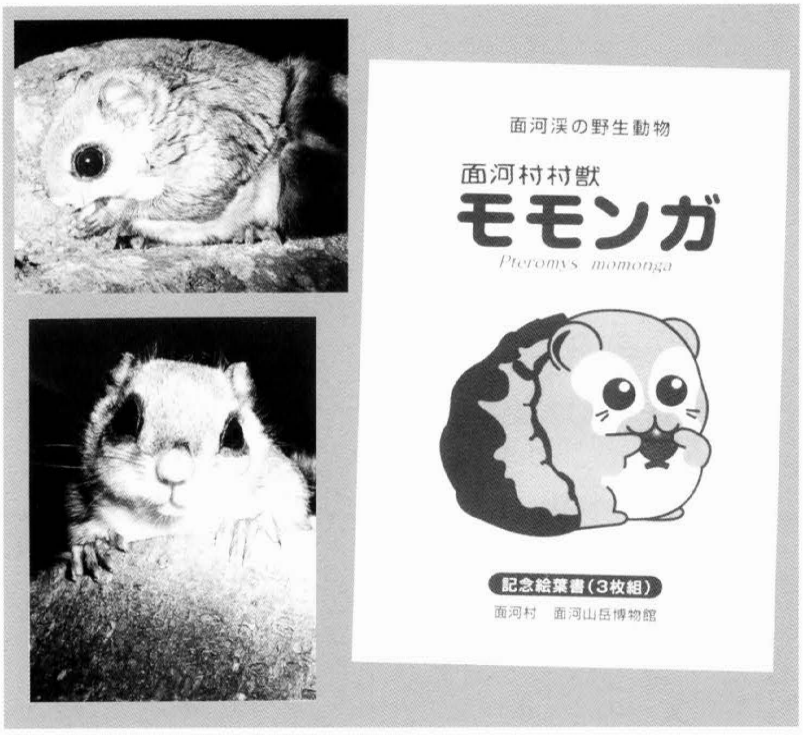
愛らしい人気者守って

面河山岳博物館はこのほど、モモンガの記念絵はがき（三枚組）とパンフレットを製作した。

モモンガは、環境庁のレッドデータブックで希少種に指定されているネズミ目リス科の小動物。面河渓はその生息地として知られており、平成八年に同村の村獣となっている。

夜行性のため、姿を見ることはめったにないが、昨年十月、同館駐車場内に迷い込んだところを保護された。愛らしい顔としぐさで一躍「人気者」に。同館には四、五年にもひょっこり姿を現している。

（平成12年4月26日）



モモンガの愛らしい姿を撮した記念絵はがき

石鎚・高山植物の絵はがき

面河山岳博物館はこのほど、石鎚の高山性植物をテーマにしたオリジナル絵はがきを作製した。

同館がデザイナーの白形毅史さんに製作を依頼。石鎚山の登山道などで、夏・秋によく見られる代表的な高山性植物のタカネオトギリやナンゴククガイソウ、リンドウなどを、細部まで丁寧に描いている。バックは白ですっきりとした印象。

同館は「写真とは違った趣があり、花をめでる気持ちがより伝わってくると思う」と話している。

八枚一組で千部発行。一部六百円で、通信販売もしている。

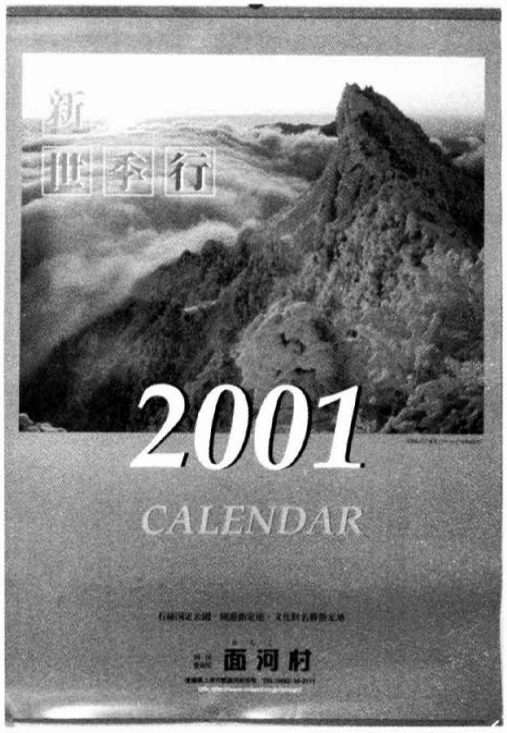
（平成12年10月7日）

石鎚山の高山植物を描いたオリジナル絵はがき

自然を凝縮・カレンダーに

上浮穴郡面河村が平成十三年のカレンダーを製作。面河の名所をとらえた写真をクローズアップしており、見ごたえのある仕上がりになっている。写真は平成四、七、九年に実施した「面河・石鎚フォトコンテスト」の入賞作を中心にしている。

（平成12年10月9日）



平成13年のカレンダー

自然観察ルート紹介

石鎚国定公園マップ作製

上浮穴郡面河村はこのほど、石鎚山や面河渓を紹介する国定公園ガイドマップ「石鎚国定公園　面河地区」を作製した。

ガイドは、石鎚国定公園が県外の観光客の増加に伴って多様な利用が望まれているのに、ガイドマップが乏しかったため、国の自然環境保護思想啓発普及助成事業を活用し五千部作製した。同様のマップは瀬戸内海や大山隠岐などでも作られている。

ガイドは国定公園だけに絞っており、自然観察路の車道・歩道に分けた面河渓・石鎚山のルートマップ、地形や動植物など自然の概要説明などを掲載している。コンパクトで両面ともカラーになっており、読みやすい構成になっている。

村関係施設やレストランなどに配布しており、無料。同村では「登山者だけでなく、一般の人も楽しめる。小さいのでデスクの上でも活用できる」と話している。

（平成14年6月20日）

面河村作製の石鎚国定公園ガイド

老木茂り、水面彩る紅葉

「秋の面河渓　紅葉の名所／耶馬も滝田も及びゃせぬ」（野口雨情）

面河渓の入り口にある景勝地・関門は、標高約六百五十メートルにある。両輝石安山岩の板状節理が面河川に浸食されて形成された渓谷で、正方形の岩塊を積み重ねたような岩壁の奇観と、青く透き通る水の色が絶妙の調和を醸し出している。

関門入り口の「錦木（にしき）の滝」から「通天橋」までの約一キロ区間は遊歩道が整備され、森林浴にはもってこい。週末ともなると、中間地点の休憩所は、周囲の景色をめでながらゆったりくつろぐ行楽客らで終日にぎわう。渓谷の紅葉が終われば、石鎚山のふもとの集落には静かで厳しい冬が足早にやってくる。

（平成11年11月17日）

色づいた木々をめでながら遊歩道を散策する行楽客

黄色い網目傘の珍キノコ

山岳博物館の岡山さん発見

黄色い網目の傘を広げ、見た目の優雅さから「キノコの女王」とも言われるウスキキヌガサタケがこのほど、上浮穴郡面河村若山で見つかった。

発見したのは面河山岳博物館副館長岡山健仁さん（三四）。台風が近づいた八月二十三日、近くにある博物館水源地の枯れ枝などを取り除きに行ったところ、杉林の斜面に自生しているのを発見した。約二・五メートル内に六本が群生しており、高さは約十五センチほど。面河村で見つかったのは二例目。

このキノコはスッポンタケ科キヌガサタケ属。熱帯系のキノコで、これまで西日本を中心に確認されている。平成九年に環境庁（現環境省）がまとめた「日本の絶滅の恐れのある植物種のリスト（レッドリスト）」では、このままでは存続が困難になると予想される「絶滅危ぐ種2類」に指定されている。

黄色い網目の釣り鐘型の傘が早朝に開き、その日の午後にはしおれてしまうため、発見される確率が低い。

（平成13年8月25日）

上浮穴郡面河村で見つかったウスキキヌガサタケ

岩陰にひそやか

アケボノツツジ見ごろ

面河渓のアケボノツツジが、ほんのりと淡紅色に色づき、見ごろを迎えている。

石鎚のアケボノツツジというと岩黒山が有名だが、面河渓も「隠れた名所」。数は多くないが、関門から五色河原へ向かう道路沿いの岩場に、チラホラとかれんな姿を見せている。

面河山岳博物館によると、花の付き具合が今一つだった昨年に比べ今年は「上出来」。黄色いヒカゲツツジ、ピンクが映えるミツバツツジも競うように咲き誇っている。面河の春の美の競演は、四月いっぱい楽しめそうだ。

（平成12年4月27日）

ほんのりと色づき、山あいに彩りを添える面河渓のアケボノツツジ

春告げる「オシドリ夫婦」

ゆっくりと流れる渓流に、ぷかり、ぷかりと浮かぶ二羽のオシドリ。この時期、面河山岳博物館裏の面河川に必ずやってくる「春の使者」だ。

飛来するのは常に雌雄一対の「オシドリ夫婦」。毎年同じ個体かどうかは定かではないが、一羽だったり、三羽以上で訪れることはなぜかないとか。同館の裏を訪れるのも年に二日。数時間後には上流へ仲良く泳ぎ去っていった。

（平成13年4月30日）

面河山岳博物館裏の面河川にやってきたオシドリ

元気に育って

迷子モモンガ、館内で保護、山に放つ

深山性の動物で、その姿をめったに見ることができないモモンガがこのほど、面河山岳博物館に迷い込んだところを同館職員らに保護された。同館で見つかったのは四回目。

保護されたモモンガは、同館で大掃除をしていた際、テラスのベランダから館内に入り込み廊下を歩いていた。頭胴長（頭から胴までの長さ）が二一・三二センチ、尾の長さが二・七センチ。モモンガの成獣の一般的な頭胴長は一四～二〇センチで、保護されたのは幼獣とみられる。雌雄は不明。

保護した当日は、つかむと手をかむなど野生の姿を見せたが、一日たつと慣れ、リンゴやミカン、ヒマワリの種などを食べた。夜行性のためか日中はほとんど寝ていたという。数日観察した後、同村関門付近の山中に放った。

（平成13年12月16日）

面河山岳博物館で保護されたモモンガ

郵便受けでスクスク

ヤマガラ6羽巣立ち

丈夫な巣箱で、天敵もシャットアウト――。面河山岳博物館で、野鳥のヤマガラが郵便受けを使って巣を作り、約一カ月間、子育てに励んだ。

真っ赤な郵便受けは、幅二十四センチ、高さ二十六センチ、奥行き十五センチ。四月初めから親鳥がコケなどを使って巣づくりを始め、五日から毎日一個ずつ六個の卵を産んだ。

四月二十三日には、四羽が一度にふ化、その後二羽も次々と産声をあげた。親鳥は頻繁に餌取りにお出かけ。辺りを警戒しつつミミズなどを口にして戻り、ヒナもすくすく育った。

ヤマガラはまれに人工物に巣を作る。実は同じ場所に二昨年も巣を作っていた。

同館側も郵便物が入れられない不便さにも「しょうがない」と慣れっこ。時々のぞいては成長を見守っていた。周囲の温かい目に見守られ、今月初めには次々と巣立っていった。

（平成14年5月21日）

郵便受けの中で元気に動き回るヤマガラのヒナ

ふるさと20世紀(216)面河山岳博物館

地道な活動根付く

面河渓や石鎚山といった恵まれた自然を持つ面河村。しかし、道路網の整備などに伴い、観光もどちらかと言えば「通過型」になりがちで、滞在して学習できる施設はなかった。そんな中、「動植物などを中心に、石鎚山系を凝縮したものを」と、村営面河山岳博物館は平成三年に開館、今年オープン十周年を迎えた。

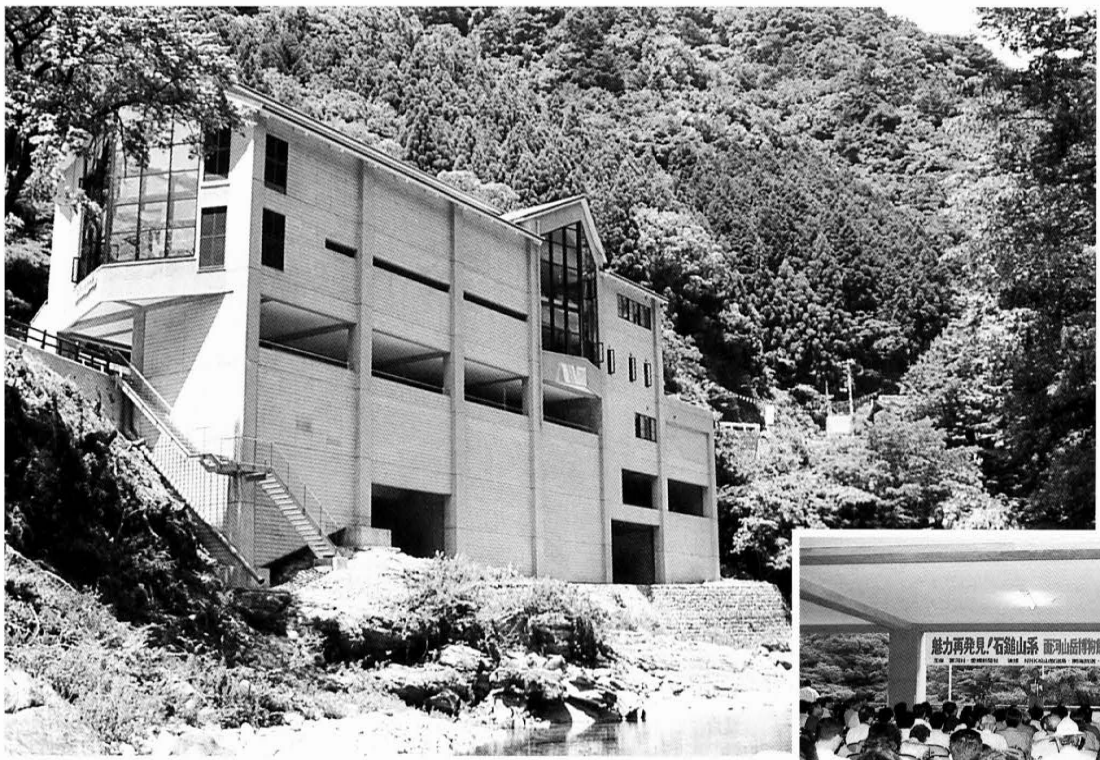
郡内唯一の博物館として、石鎚山の山岳信仰や登山史、動物の剝製(はくせい)や植物標本など、充実したコレクションを持ち、定期的に特別展も開催するなど活発な活動を展開する同館だが、開館当初はまさに「手探り」の船出だった。

同館の建設が始まったのは平成元年。二年に完成したが、展示品はその後、元県立博物館副館長の楠博幸さんが中心になって収集、一般公開にこぎ着けたのは三年四月だった。「資料の保存のための研修に県外へ行ったり、学校など教育施設へのPRなど、取り組むことが山積していた」と、開館当時から勤務する岡山健仁副館長は振り返る。

一般に、博物館や美術館といった文化施設には、経営の難しさが常についてまわり、同館も例外ではない。また、せっかく開館しても活動が停滞する「造りっ放し」の館も多い。しかし同館は、開館時約二万点だった所蔵品をこつこつと増やし、現在は約七万点。年数回の特別展も積極的に開催している。面河少年自然の家に宿泊した児童生徒の大半は同館を訪れるなど、学習機能施設としての役割も果たしている。

今年七月に入館者十万人を達成。決して早い期間とは言えない。だが根強い愛好者も多く「リピーターが多いのも特徴」と同館は説明する。今後は資料収集や研究、教育普及といった開館時の理念を守りつつ、「面河渓の入り口という恵まれた立地条件を生かして、フィールドミュージアム(野外博物館)としての活動を考えていきたい」と岡山さん。今年十月の一カ月間の入館者数は約千人で、例年を上回る数字を記録した。地道な活動は地域に根付き、村外にも徐々に浸透しつつある。

(平成12年11月9日)



約7万点の所蔵品がある面河山岳博物館

開館フォーラム
(平成3年)